

廣池千九郎が提起した「最高道德」について（その 1）

社会科学研究室
教授 梅田 徹

廣池にとっては最高道德の語を用いるのは必然的であったかどうかについて検討した。最終的には、廣池が発見し、科学的に解明しようとしたことの内容は、「最高道德」という言葉でなければ表現できなかったと結論づけた。ただし、その言葉が定着するにはかなりの年月がかかった。

『回想録』によれば、廣池が後に「最高道德」と称することになる内容は『伊勢神宮』の執筆の時期に認識され始めた。廣池は、日本国体の淵源を研究した成果を記した『伊勢神宮』では、重要な部分を掘り損ねていたのであるが、ある時期に宗教的な経験を経て、後に「最高道德」に結晶化する中核的な意味（天照大神の聖徳の何たるか）を把握することができたというのである。その経緯は、大正 4 年 12 月刊『伊勢神宮と我国体』に盛り込まれている。

では、廣池がいつ「最高道德」の語を使い始めたのか。「最高道德」の語の初出は『日記』の大正 3 年 7 月 1 日の条であることが確認されているが、まだ、この時期は天理教の文脈で思考していたことが窺える。『伊勢神宮と我国体』では「至高道德」という言葉が使われ、『日本憲法淵源論』では、「人類の最高道德」という表現が複数回使われているが、いずれも明確な意思の裏付けがある自律的な言葉になっていない。モラルサイエンスの形成を意識し。その中に「最高道德」を位置づけようとしたのは、もう少し後になってからである。その時期は、特定はできなかったが、おそらく大正 7 年ごろには「最高道德」という言葉が廣池自身の中でも、明確な意思の裏付けをもって定着し始めていたのではないかという問題提起を行った。

「最高道德」の語は最初に使われてから、定着するまでに時間がかかった。その時間の経過は、おそらく天理教の文脈において生まれたこの言葉が、廣池の中でモラルサイエンスの中の言葉になり、最終的には、モラロジーのという学問体系の中に位置づけられることになるまでの時間的な経過があるものと思われる。それを確認するためには、廣池の内部で天理教の信念、教理がどのようにフェードアウトし、あるいは一方におけるモラルサイエンスの考え方が廣池の中でどのように固まっていたのかを吟味する必要があるであろう。別の機会に探るべき課題にしたい。

最後に、『回顧録』に依拠するモラロジーの歴史研究に対して若干の制約ないし限界があることを指摘した。なぜなら、廣池自身は、モラロジーを確立した段階で、自身の障害に対して「意味づけ」を行っている。昭和 4 年 6 月の口述を基に編纂された『回顧録』には、廣池の「意味づけ」が反映されている。一種のフィルターがかかっているのである。そのフィルターを外して当時の資料に向き合うと、これまでとは少し違ったものが見えてくる。今回の発表で、私自身はその一部を垣間見た気がする。